

親鸞さまの

【本文】

によらいだいひ おんどく
如 来大悲の 恩徳は

身を粉にしても 報ほうずし

ししゅちしき
師主知識の 恩徳も

骨をくだきても 謝あやまりし

【意記】

阿弥陀様の 大いなるお慈悲に浴する
ご恩は

身を粉にするほど大切にしたいもの
です。

お釈迦様やその教えを伝えてくださ
った高僧の方々のご恩もまた

同じく大切にしたいものです。

【私の味わい】

最近「親ガチャ」なる流行り言葉があるそうです。硬貨を投入してレバーを回すとカプセルに入った小さい玩具が出てくるガチャガチャという遊具があります。お目当ての気に入ったものが出てくるかに一喜一憂するものではありませんがこの遊びと親子関係を重ね合わせて「親ガチャ」と言っているのです。つまりハズレの「親」だから人と比べて人生をマイナスからスタートせざるをえない、という慨嘆がいたんなのです。諸事情あることなのでしょうが、私が気になるのはその言葉を自分中心、気に入るかどうかという視点で親を見て発していないか、ということです。親子関係に限らずもの見方が自己都合で、自らの思い通りにしようとする心の働きを「煩惱」といいます。これは、人と仏様との関係でも例外ではありません。

親鸞聖人は、仏様との間に「恩」の語を用いられています。恩という漢字は、まず上の「因」に大きな意味があります。これは、布団口、に大の字になつて寝ざる人、を表しています。想像すれば分かることですが、布団は最初から用意されたもの、ではありません。せん、そもそも、綿の栽培に始まって、縫う人、運ぶ人、買う人、敷く人があてこそそこにあるものです。仏様は私達の為にお浄土をご用意下さった。その私達を思い動いて下さったお心の上に大の字になつて安心できる「心」。これを「恩」と言われたのです。

阿弥陀様のご用意下さった極楽、その布団に大の字になれる安心と感謝

その心は、自分中心の視点では決して生じえません。